

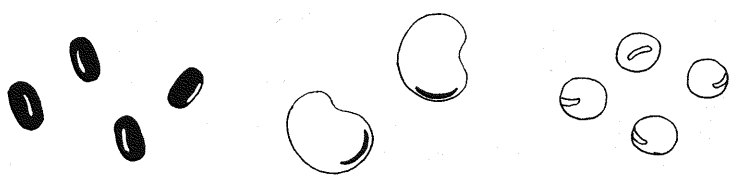


## 巻頭言

# 「総合施設」創設に思う

神長 美津子

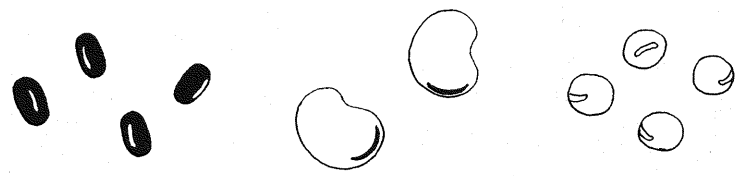
今、幼児教育は、大きな転換期にさしかかっている。そのひとつに、幼稚園でも保育所でもない小学校就学前の教育・保育施設である総合施設（仮称）の創設により、現行の幼稚園と保育所の二元の保育制度が変わりつつあることがあげられる。総合施設の創設にかわっては、平成十七年度は、指定を受けた三十六施設において、試行的にその取り組みが実施され、対象者と利用形態、施設や設備、学級編制や職員資格、教育と保育の内容、利用料と保育料等についての検討がなされている。その成果を受けて平成十八年度には、総合施設にかかわる法律等が整備され、既存の幼稚園や保育所からの移管が本格的に実施されることになる。まさに、女性の社会進出の拡大や地域の未就園の子どもをもつ保護者



に対する子育て支援などの保育の多様なニーズが高まる中で、新しい時代の保育制度が生まれつつある。これまでも幼稚園と保育所の一元化に関する論議は何度も繰り返しなされてきたが、ここに至って大きく動き始めたことは、確かである。

実は、昭和二十二年学校教育法の制定にあたり幼稚園の取り扱いをめぐって、興味深い話がある。当時、幼稚園が他の学校種と肩を並べて正規の学校となることに対し、幼稚園就園率は低く（五歳児就園率七・四パーセント）、幼稚園は少数の幼児に対する贅沢な施設であるから、正規の学校とすることは適当でないとする反対意見があつたそう。また、幼稚園が、体系化された学校教育の枠の中に入ることにより、明治以来、日本の幼児教育が築いてきた「幼児教育の独自性」が失われてしまうのではないかという危惧もあつたそう。

その後には始まる新しい時代の中で、幼児期の教育・保育がいかにあるかの論議を様々に重ねた結果、幼稚園を大衆のための一般的な施設とし、すべての幼児が小学校就学前の教育を受けられるようになるためには、幼稚園を学校教育法に組み入れることが必要な措置であることの結論を得た。また正規の学校とすることは幼児教育の独自性を失うものではないことを確認し、幼稚園が学校教育の最初の段階として位置づけられたといわれている<sup>1)</sup>。まさに「学校教育のはじまりとしての幼稚園」には、戦後の貧しくきびしい時代にあつて、日本の子どもたちの健やかな成長と幸せをひたすら願う関係者の熱い思いと、時代を

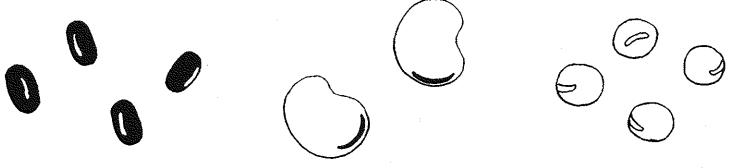


見据えた適切な選択があつたといえる。

さて、それから六十年が経過した現在の幼児教育・保育は、どうであろうか。ほとんど幼児が、幼稚園または保育所に通い、小学校就学前の教育を受けている。さらに、総合施設の創設により、保護者の就労等の有無にかかわらず、幼児教育を受けることができるようになり、幼児教育の機会は一層拡大することになる。

しかし一方、時代の変化の中で、子どもや子育てを取り巻く環境は大きく変化し、新たな課題も生じている。中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について―子ども最善の利益のための幼児教育を考える―」（平成十七年一月二十八日）では、子どもや子育てを取り巻く環境の変化に伴い、家庭や地域社会の子育て力が低下していることが問題となり、子どもたちの失われた育ちの機会を確保することの必要が指摘されている。具体的には、幼児教育において、家庭、地域社会、幼稚園や保育所等の施設の三者の連携を推進する総合的な施策の充実を図ることや、学校教育との連携を推進し、幼児の発達や学びの連続性を確保することである。この答申では、戦後六十年の時を経て、改めて幼児教育の重要性を説き、新しい時代の幼児教育の在り方について、国民各層に向けて広く訴えている。あえて「子どもの最善の利益のために」という副タイトルをつけることに、課題の深刻さや緊急性を読み取ることができる。

ある総合施設を運営する園長先生の言葉を思い出す。それは、「総合施設の課題は、ソ



フト面で幼保の一体化を図ることだが、それはなかなか容易でない。園運営では、よく幼・保がぶつかり合うが、そのどちらをとるかの議論をしてもなかなか先に進まない。自分たちの園に通う子ども一人ひとりにやさしい方策を見つけないことが解決策につながる。この意味で、毎日が、「新しい時代の幼児教育の創造である」という言葉である。新しい時代に向けて改革を進める姿勢として、大事な指摘である。

確かに、時代の変化は著しい。新しい時代とは、どんな時代なのだろうか。それは、これまでの時代、これまでの社会と、どう異なるのだろうか。現時点では、こうした問いに對する答えは、必ずしも明確ではない。しかし、総合施設の園長先生が指摘するよう、新しい時代の幼児教育・保育は、我々が選びとり、創りあげていかねばならない。

その際確認しておきたい、少なくとも今わかっていることは、次世代を担う子どもたちを人とつながり人間らしく育てることが教育の役割であり、その基盤づくりとして幼児教育・保育の充実が必要であるということである。これを起点とし、時代を見据えた保育制度を考えていきたいものである。

(東京成徳大学)

参考文献

1) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに 一九七九年